公共牧場経営管理のチェックポイント

（畜試　経営部）

1．背景とねらい

公共牧場の運営状況調査が毎年実施されており、各牧場ごとに放牧頭数や事業収支等の数値がまとめられている。

しかし、これらの数値を牧場の管理運営の現状把握、問題点の抽出や改善方向の検討等に十分活用しきれていない面がある。

そこで、これら数値から算出できる簡便な公共牧場経営管理指標を組み立てたので普及に供する。

2．技術の内容

1）牧場の放牧実績から放牧強度を、事業収支実績から粗収益係数を算出し、放牧強度と粗収益係数の関係を図化する（表１、図１）。これにより、当該牧場の放牧利用状況と経営の収益性が把握でき、また同一経営類型の牧場との比較等により県内における位置づけや問題点及び改善方向の糸口が明らかとなる。

2）牧場の経営収支実績、放牧延頭数及び預託料から損益分岐点操業度を算出する（表２）。損益分岐点分析により事業収支が均衡する操業度（放牧延頭数及び預託料）が求められ、利用率向上と経営収支改善の目標値が明らかとなる。

3．指導上の留意事項

1）放牧強度、粗収益係数、損益分岐点操業度の３つの指標で計算された指標値について、同類型の牧場間及び当該牧場自体の時系列的な比較検討を行うことが肝要であり、これにより改善経過や目標に対する到達状況がわかる。

2）本県における牧養力（放牧期間中の単位面積当たりの放牧可能頭数）の目標値は、「草地管理指標」（農水省畜産局）で45t／haの草地生産力の場合で540ＣＤ、また下限の目標値として35t／haの草地生産力で420ＣＤとされているので、これら目標値との比較をするとともに当該牧場の草地単収や収容可能頭数を常時把握して置くことが重要である。

3）公共牧場は、自然条件や社会・経済的立地条件の多様性とともに、経営形態や経営方針等もそれぞれ異なっており、一律に粗収益係数の目標値を提示することは困難であるが、経済活動を行う事業体としての企業性を考慮すれば、粗収益係数は100が目安となる。

4．試験成績の概要

表１　放牧強度及び粗収益係数の計算方法(平成４年度県内黒毛夏期牧場及び０牧場の例)

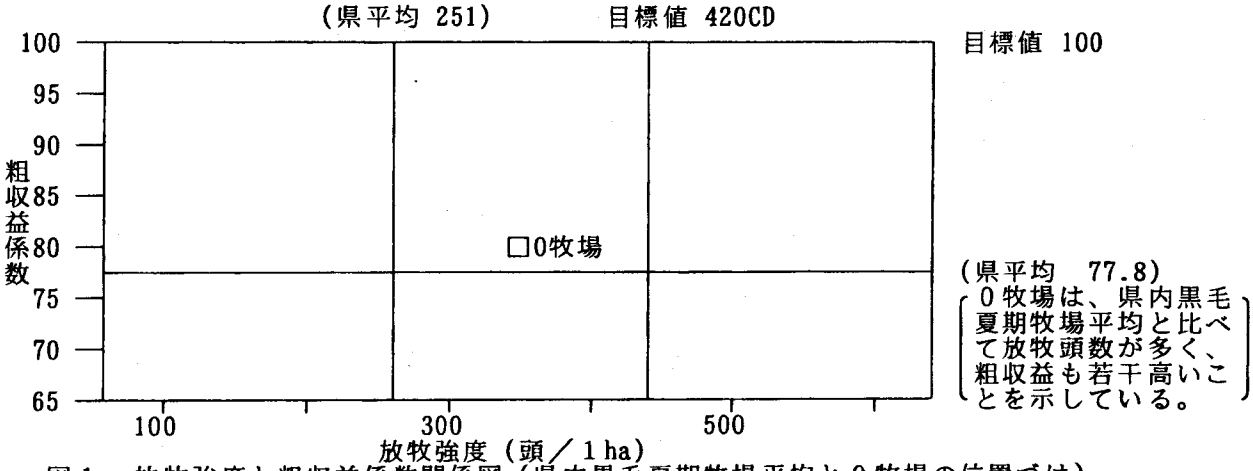
	放牧強度	粗収益係数
県内黒毛夏期牧場全18牧場の平均	①放牧延頭数 378,475頭 ②放牧対象面積 1,510ha ③放牧強度 ①／②＝251頭	①事業収入 75,209千円 ②事業支出 96,717千円 ③粗収益係数 ①／②＝77.8
０牧場の例	① 52,526頭 ② 160ha ③ ①／②＝328頭	① 12,081千円 ② 15,364千円 ③ ①／②＝79.0

・放牧強度(頭／ha)＝ 放牧延頭数(頭) ／ 放牧対象面積(ha)

（・一定の草地に対する放牧の強さを表すもので、放牧期間当たり、単位面積当たりの放牧頭数で示される
・放牧延頭数は成畜換算頭数である）

・粗収益係数＝ 事業収入 ／ 事業支出 ×100

（・100円支出していくら収入が上がったかを示す指標で係数が高い程経営効率が高い
・事業支出は、間接経費（減価償却費、資本利子）を除いた金額である）



（０牧場は、県内黒毛夏期牧場平均と比べて放牧頭数が多く、粗収益も若干高いことを示している。）

図１　放牧強度と粗収益係数関係図（県内黒毛夏期牧場平均と０牧場の位置づけ）

表２　損益分岐点操業度の計算方法
（０牧場の事例を基に事業収支が均衡する放牧延頭数及び預託料を求める）

（単位：頭、円）

区分／項目	現状	損益分岐点			
		①頭数固定	②預託料固定	③頭数２割増	④預託料300円
放牧延頭数	52,526	52,526	78,778	63,032	53,635
実頭数／１日	282	282	424	339	288
預託料	230	345	230	268	300
事業損益	▲ 2,311千円	±０			

損益分岐点操業度の計算式

$$P = \frac{F}{1 - \frac{V}{S}} \times \frac{1}{X} \quad \text{（計算式Ａ）}$$

Ｆ‥‥固定費
Ｖ‥‥変動費
Ｓ‥‥事業収入
Ｘ‥‥現状の預託料
Ｐ‥‥損益分岐点の放牧延頭数